

トルコ近現代史の中のユダヤ教徒

柿崎 正樹

(財) 中東経済研究所

外部専門家 (トルコ政治)

トルコ政治研究史においてこれまであまり注目されてこなかったユダヤ教徒に関する研究成果がここ 10 年ほどの間に多数発表されている。その契機となったのは 1992 年に行われた「500 周年記念事業」である。1989 年にイスタンブルで設立された「500 周年記念財団 (500 üncü Yılı Vakıfı)」が中心となり、1492 年にイベリア半島から追放されたユダヤ教徒の多くをオスマン帝国が受け入れたことを記念し、また、トルコにおけるユダヤ教徒が長年享受してきた安定と平和を世界にアピールすることがこの事業の目的である。2002 年にはトルコで初めてのユダヤ人博物館がこの財団によってイスタンブルのカラキョイに開館した。

「500 周年記念財団」の設立メンバーの一人である Naim Güleriyüz は自らが館長を勤めるユダヤ人博物館のホームページに「トルコ系ユダヤ人の歴史」と題する概説を載せ、そのなかでトルコはユダヤ教徒にとって「天国」であったと述べ、次のように続ける。

この時代 (1492 年のイベリア半島からのユダヤ教徒の受け入れ) に証明された博愛主義は、信条、文化、出自を異にする人々に対してトルコ政府とトルコ国民が伝統的に示してきた慈愛の心そのものであった。正にトルコは世界中からの難民を抱える国が見習うべきモデルとしての役割を果たすことができたのである。

これまでトルコにおけるユダヤ教徒に関して書かれた書物の多くは Güleriyüz のこの一説に込められた歴史認識を共有しているといえる。つまり、トルコとユダヤ教徒の共存の歴史、トルコのユダヤ教徒に対する寛容性、トルコにおける反ユダヤ主義の欠如などからなる「500 年の友好テーゼ」とも言える歴史の捉え方が一般的であった。トルコ近現代史の研究で広く知られている Stanford J. Shaw の *The Jews of the Ottoman Empire and the Turkish Republic* (1991) は特に「友好テーゼ」の色彩を強く放っている一冊である。Shaw によれば、オスマン帝国内におけるユダヤ人社会の興亡はオスマン朝のそれ自体と一体であり、ユダヤ人社会が安定し繁栄しえる環境はスルタンの統治能力によって提供・維持されてきたのだ。また、ギリシャ人やアルメニア人とは異なり、トルコの解放戦争 (独立戦争) およびアタテュルクによるトルコ革命をユダヤ教徒は積極的に支持したとされる。トルコ共和国においてもホロコーストの恐怖から多数のユダヤ人がトルコに救われ、その中にはトルコの学術・芸術分野で貢献した者が多数いたことなどから、オスマン帝国のみならず現在のトルコ共和国においてもユダヤ人社会はトルコ社会と良好な関係を維持しているという。

一方、近年ではこうした研究に対する異議も登場しつつある。Rifat N. Bali は 1999 年

に出版した *Cumhuriyet Yıllarında Türkiye Yahudileri: Bir Türkleştirme Serüveni [1923-1945]* (共和政期におけるトルコのユダヤ人：あるトルコ人化の試み[1923-1945]) において、トルコ共和国という新しい国民国家の建設はトルコ国内のユダヤ人に対する文化的経済的トルコ化政策をもたらしたと議論している。彼は当時のユダヤ社会と事実上の一党支配を行っていた共和人民党との関係やトルコ社会がユダヤ教徒をどのように認識していたのか、そしてトルコ化政策がユダヤ教徒にいかなる影響を及ぼしたのかといった疑問を、膨大な一次史料を駆使して明らかにしている。そこから導き出される Bali の結論は、トルコ共和国とユダヤ教徒の関係は友好的では決してなく、そこにはむしろ様々な反ユダヤ主義的政策や世論、そしてユダヤ教徒に対する圧力・反感が指摘しうるというものである。

ところで、トルコにおける反ユダヤ主義にはどのような要素があるのであろうか。また、それはいかなる思想を持った人物によって作られてきたのであろうか。トルコ共和制初期には、ユダヤ教徒は強欲な商人として大衆紙に頻繁に登場している。また、Cevat R. Atılhan のように強烈的なトルコ民族主義に加えてナチス・ドイツの人種主義から影響を受けた民族主義者にとって、トルコ国内のユダヤ教徒はいかにトルコ語を習得しトルコ風の姓名を使ってもユダヤ教徒はあくまでもトルコ国民とは認められず、彼らにとっては他者であり続けた。

しかしながら、トルコ共和国史において反ユダヤ主義を最も頻繁に利用してきた担い手はイスラム主義者であった。1950年代から60年代には、フリージャーナリストの Salih Özcan は『シオニズムの目的』の中で、「ユダヤの脅威」を世界に対して喚起しようとした。また、Ziya Uygur は『旧約聖書におけるシオニズムの基本原則と議定書』と『歴史の中の反逆と革命、そして旧約聖書におけるシオニズムの基本原則、目的、および議定書』において、時代を通して世界、特にトルコのあらゆる諸問題の原因としてユダヤ人を捉えており、最後には19世紀末にロシアのニコライ2世がユダヤ人の世界支配の野望を流布するために作成させた偽造文書『シオンの賢者の議定書』のトルコ語訳を盛り込んでいる。1960年代後半には、アンカラ大学神学部の教員からも反ユダヤ主義が顕著に見られる書物が記された。そこでは、ユダヤ教に対するイスラム教の優越性が説かれ、共産主義や進化論、そしてシオニズムは全てユダヤ教徒による画策だとされた。

1970年代になると、イスラム主義的政治家の Necmettin Erbakan が設立した国民救済党により反ユダヤ主義的言説がその舞台をマスメディアから政治へと広げることになる。Erbakan は欧州共同体(EC)を、シオニストとフリーメイソンの援助を受けるカソリック国家の組織であると激しく非難すると同時に、反ユダヤ主義的言説をトルコの社会経済的諸問題の原因に結びつけたのだった。また、度重なる中東戦争は反ユダヤ言説が反シオニズムとしてイスラム主義者に取り込まれる大きな契機となった。

最後に最近の反ユダヤ主義の事例としては、トルコにもいわゆる「ホロコースト否定論」が登場した。イスラム主義者としてこれまで強くダーウィン進化論を攻撃してきた Harun

Yahya による『ホロコーストの嘘』では、ホロコーストはイスラエル国家の建設を目指すユダヤ教徒の利益と密接に結びついていたとのべられている。また、1990年代にはイスタブルのシナゴグを標的としたイスラム過激派による爆弾テロ事件が数回発生しており、ユダヤ教徒が直接の対象となっている。